

博士の微妙な愛情 Beryl Bainbridge, *According to Queeney*

小山(宮本) 朋子

はじめに

イギリス18世紀の文豪 Samuel Johnson (1709-1784) は、「ジョンソン博士 (Dr. Johnson)」として知られるが、その人となりや発言は、ジョンソンに私淑した James Boswell (1740-1795) の伝記 *The Life of Samuel Johnson* (1791) によって伝えられたところが大きい。有名な「ロンドンに飽きた者は人生に飽きた者だ。ロンドンには人生が与えうるもの全てがあるのだから」(When a man is tired of London, he is tired of life; for there is in London all that life can afford.) に代表される、ジョンソンの機知と含蓄に富んだ言葉や、その華やかな交友関係の模様であふれるこの書には、しかし、不自然なまでにほとんど触れられていない部分が存在する。それはジョンソンの後半生(1765年から82年まで)にそのパトロン的存在となった、裕福な醸造家 Thrale 家との交流である。この欠落は師に対して崇拜に近い感情を持っていたボズウェルの嫉妬が原因であるという推測⁽¹⁾にもうなずけるほど、文豪とこのブルジョワ一家の関係は密接で分かちがたいものであった。

ジョンソンが My Dear Master と呼んだ家長 Henry Thrale との交流もさることながら、ジョンソンがとりわけ親しい気持ちを抱いていたのが、スレール家夫人 Hester Lynch Thrale (後に Mrs. Piozzi, 1741-1821) である。そして、スレール家の子供の中でとりわけジョンソンの愛情を集めたのが、長女 Queeney (本名 Hester Maria Thrale, 1764-1857) であったとされる。スレール夫妻の長子である彼女が生まれたのは1764年、スレール家がジョンソンと知り合う前年であり、それゆえ両者の関係が発展したあとやがて疎遠となってゆく成り行きは、クウィーニーが幼子から大人の女性へと成長を遂げる過程にぴったり重なる。

現代英国の小説家 Beryl Bainbridge (1934-) の *According to Queeney* (Little, Brown: London, 2001)⁽²⁾ は、その17年間のジョンソンとスレール家の歴史を下敷きに、両者の愛憎劇をフィクションライズした作品である。題名を一見しただけでは、全編にわたってクウィーニーが語り手であるかのような印象が生まれるかもしれないが、クウィーニーはあくまで視点人物のひとりであり、かつ各章に引用される（母親とジョンソンの情交を否定する）手紙の書き手に過ぎないのだ。ジョンソンの初めての伝記を書いた Sir John Hawkins の娘 Laetitia Hawkins からの執拗な問い合わせに対して、渋々、散発的にクウィーニーが書いた手紙を下敷きに、ベインブリッジは資料と創作力を巧みに融合させ、数多くの登場人物——ジョンソンと彼を取り巻く女性たち——の思惑と視線との交錯のうちに、ジョンソンの晩年を見事に再構成してみせる。

本稿では、本作の主要人物であるジョンソンとミセス・スレール、そしてクウィーニーの三者を中心に、ベインブリッジの創作によるところが大きいと思われるジョンソンのスレール母娘への微妙で不思議な愛情について検討し、ボズウェルによって（おそらくは崇拜者による美化というフィクショナルな要素を含みつつ）記録された知識人中の知識人ジョンソンと対置されるべき、身近な女性たちの視点から新たな光を当てられた（セミ）フィクショナルなジョンソン像について考えてみたい。

1. ジョンソンとミセス・スレール

先ほど述べたとおり、ジョンソンがスレール家と知り合うのは1765年初めの冬、ヘンリー・スレールの古い友人 Arthur Murphy を介してのことであった。数ヶ国語を操ったという才気煥発のミセス・スレールがジョンソンに与えた印象は強く、帰宅したジョンソンは同居人のひとりである盲目の女性詩人 Mrs Williams に向かって思わず真情を吐露しそうになるが、見透かされまいとかるうじて話を逸らす。

[H]e replied and then, in spite of himself, blurted out, 'Mrs Thrale is an unusual woman.'

'How so?' Countered Mrs. Williams. 'In looks or in intellect?'

Had he known aside caution and spoken the words in his head, he

would have confided that Mrs Thrale had sparkling eyes, narrow shoulders, penetrating wit, scholarship of the female kind, a favourable interest in himself and a leakage of milk from her right breast.

Instead he said, 'James Woodhouse has an impediment of speech, ...'

(p. 6)

ここには登場人物としてのミセス・スレールを構成する特徴が簡潔にまとめられていて興味深い。このパッセージは彼女の容姿・知性・女性らしさ・母性ととも、ジョンソンの男性的視線をも強く感じさせ、今後の二人の関係の発展を暗示している。さらに乳児のクウィーニーに初めて Sweeting と呼びかけて喃語で反応されることで、ジョンソンの意識は 'a member of the club' から 'part of a family' へと大きな変化を遂げ (p. 7), スレール家の一角に与えられた部屋に滞在する時間も増え、クウィーニーを初めとした子供たちの家庭教師的な役割も担うようになる。

もっとも、ジョンソン自身の「家族」は複雑な問題をはらんでいる。21歳上の妻 Tetty (Elizabeth Porter) に先立たれた後は、ミセス・ウィリアムズ、子連れ寡婦 Mrs Desmoulins, ジャマイカ人の元奴隷で召使として働く Francis Barber, やぶ医者 Mr Levet など、いずれも自立できない境遇にある人々を哀れみ、自宅に寄食させていた。しかも互いにいがみ合う彼らに囲まれ、気苦労が耐えない。変則的な家族とはいえ、その様子を描き出すインブリッジの行文からは、常に「父」「家長」であろうとするジョンソンの姿が浮かび上がってくる。もっとも、ミセス・デムーランが 'Tetty's demise had been a merciful release rather than a matter of regret.' (p. 14) と考えるように、いまだジョンソンは妻の死を嘆くものの、夫婦仲は(史実として)さほどしっくりいっていなかったらしい。ミセス・ウィリアムズは、それを強調するかのよう、ジョンソンがテティに夫婦生活を拒まれたエピソードを回想している (pp. 182-3)。パートナーとの生活では精神的・肉体的ともに満たされず、同居している女性二人——特にインブリッジの説ではミセス・デムーランはかつてジョンソンの愛人であったらしい——でも埋められなかった穴をびたりと埋めたのが、ミセス・スレールであった。

この小説においてジョンソンがミセス・スレールに求める役割はまさしく「妻」であり、しかも理想的な振舞いを常に要求して止まない。朝食の席にその姿が見えないと彼女を責め (p. 32), 故郷 Lichfield にスレール夫

妻とクウィーニーを伴った際、ミセス・スレールの服装が地味だと言い張って鮮やかなドレスに着替えるよう命令するエピソード (pp. 97-8) などはその端的な例だろう。さらにジョンソンの彼女に対する性的欲望を、ベインブリッジは作中もっとも生々しい文体で描き出す。

Even now, as he got to his knees in an attitude of prayer, his body betrayed him and he experienced a stirring of lust he was powerless to subdue. Excitement mounting, he conjured up a flurry of skirts, a bulge of thigh, the exclamation mark of a scar above a pouting lip. As he gave way to this compulsion, raised hands lowering to pleasure himself, he discerned that it was not so much madness that disordered him but rather the human condition. Man's spiritual self, he reasoned, panting, trailed far behind the physical.

(p. 82)

この箇所、とりわけ7-8行目の「人間の精神は…肉体に比べてはるかに後れを取っている」の一文は、欲望の対象であるミセス・スレール自身がジョンソンを「体よりも頭で生きている人」(p. 142) と考える部分ときわめて対照的であり、人並みに煩惱を抱えたジョンソンの人間らしさを前面に押し出す効果を上げている。それを確証するかのように、ジョンソンの友人 Bennett Langton はスレール邸でのジョンソンは文学クラブでのジョンソンとは「全く異なった存在」で、「(文学クラブでの) 彼は、彼を天才と認めている人々に囲まれ、知的な刺激を歓迎していた… (スレール邸での) 彼は、ある女性の気まぐれな愛情に包まれて満足している」(p. 192) と表白しており、ミセス・スレールに対する執心は傍目にも明らかであったことが示されている。

母ミセス・ソールスベリーの亡き夫に対する愛情に羨望を抱くミセス・スレールにとって、普段はキスもしてくれない夫ヘンリーは、必ずしも愛の対象ではない (p. 26)。本に関心がない夫では満たされない文学的・知的関心と、当代切っの知識人たちをもてなす女主人としての名誉欲を満たしてくれるジョンソンの存在は、彼女の内面的空虚を満たすものであり、それゆえにこそ彼を積極的に受け入れることになったのだ、とベインブリッジは読者に印象付ける。

このように、本作におけるジョンソンとミセス・スレールの間にはギ

ブ・アンド・テイクの関係が成り立っているのだが、彼女の側にも知らず知らずジョンソンに対する独占欲が生じている様子も見逃せない。ジョンソンがミセス・ウィリアムズと結婚するはずだったというミセス・デムーランの流した噂を聞いた時、彼女は「風変わりなミセス・ウィリアムズのことを頭から離れなく」なり、ミセス・ウィリアムズにマナーの悪さを注意してそれに従うジョンソンの姿を思い出し、「妻の尻にしかれている夫の姿ではないか」と考え、心を乱す (p. 123)。また、ジョンソンが「かわいい女性 (a pretty woman)」についての見解を夫に話すのを聞き、それが自分にまったく当てはまらないと考えた彼女がすねた様子を示してその場を離れると、追いかけてきたジョンソンがその手を取り「頑固な困った子」となだめる場面 (p. 129) は、親子の様でも、長年連れ添った夫婦の様でもあって、二人の親しくも微妙な関係を象徴している。

もうひとつ、注目すべき共通項として、二人がつねに「死」への恐怖に憑かれている点が挙げられるだろう。ジョンソンのそれは、妻ティヤや自殺した弟 Nathaniel への深い思い、また死期を迎えたミセス・スレールの母親 Mrs Salusbury に対する強い忌避感に象徴されている。「死への恐怖は理性的な人間にとってごく当たり前のことで、生きている間はただ死への恐怖から逃れるばかりなのだ」 (pp. 148-9) という彼の言葉は、その率直な告白と受け取ることができよう。また、この小説のプロローグとエピローグにジョンソンの死が描かれるが、エピローグで彼の遺体解剖の場面が登場する点は見逃せない (pp. 2-4)。今や一個の平凡な骸となった、人々がいささか俗なる推測を大っぴらに注入することのできる空白の存在となったジョンソンが最初に提示されることによって、小説という世俗的芸術形式が料理すべき素材としてのジョンソンが読者の眼前に立ち現われるのである。

一方ミセス・スレールは、身内や子供たちを次々と襲う病と死への心配に追い立てられている。12人のうちある程度の年齢まで育ったのは5人で、とりわけ唯一の男子である Harry は彼女の懸念の対象であり続けた。父親に似て無分別な食欲を見せる息子に起こる不幸を早くから予感し (p. 91)、フランス旅行中にも、教会の彫刻を見て、ハリーに不吉なことが起こったのではという懸念をジョンソンに打ち明ける (pp. 143-4)。結局ハリーは急性の病気であっさり世を去るが、これがスレール家崩壊の一因となり、ついには夫ヘンリーも半ば自殺のようにして亡くなる。

名門スレール家に嫡男を産み落とし守り育て、かつ夫に忠実に仕えるという、父権的社会における女性の第一義的役割を果たし切れなかった彼女は「母」「妻」の両面において中途半端な存在となってしまふ。二つの死のよつて作り出された空白に注入されるかのごとくかのごとく登場したのが、クウィーニーの音楽教師、そして後に二人目の夫となるイタリア人歌手 Piozzi であった。

ピオツィとの結婚を決意した彼女に、ジョンソンは激しい抗議の手紙を送る。「あなたを愛し、敬い、尊敬し、あなたに仕え、あなたをこの世で一番の女性だと考えてきた私に、あなたの運命が取り返しのかかないものになる前にもう一度会ってください」(p. 233) という最後の数行は、ほとんど恋人に復縁を迫るかのごとくである。結局、この手紙がきっかけとなって両者の縁は切れてしまひ、その後のミセス・スレールの人生について、ジョンソンは目を掛けていた女流作家で、ミセス・スレールやクウィーニーと親しい Fanny Burney の口から聞くことになる。作品中での登場回数は少ないものの、主要三人物をつなぐリンクとしてのファニーの存在は無視できないものではあるが、この点については本稿では割愛したい。

2. ミセス・スレールとクウィーニー

ジョンソンとミセス・スレールの関係がこの作品の横糸だとすれば、ミセス・スレールとクウィーニーの親子関係は縦糸だと言つていいだろう。ジョンソンとミセス・スレール関係と同様、この母娘もまた、複雑で分ちがたい愛憎によつて強く結ばれている。

まず、幼いクウィーニーが作中初めて母親に反抗心を垣間見せる場面を見てみよう。彼女が2歳にもならない時分、ふと周りから姿を消した娘を探し回つて見つけたミセス・スレールが、彼女に呼び掛けて、乳母から娘を受け取ろうとするくだりである。

She [Mrs Thrale] met with resistance: no amount of tugging, or pinching, would budge the child. Face flushed with resolve, Queeney stared defiantly and tightened her grip about Nurse's neck. ...Mrs Thrale would have slapped her into submission but for the lofty presence of Bennett Langton.

'The bond between nurse and child', he observed unwisely, 'is often stronger than one suppose to exist.'

(p. 29)

このやり取りはこの母娘のその後の関係を要約したものと言ってもいい。まだ幼子であるにもかかわらず、「(ベネット・ラントンがいなければ)ぴしゃりと叩いて」クウィーニーを押さえつけ、体罰を加え、つねに支配しようとする母親に対し、幼いクウィーニーは反抗し続ける。体罰は本文中に何度も登場し、ほとんど虐待とも言うてもいいくらい頻繁に行われている。「見つかったらわがままを叱られて、キスされて、それから否応なしに叩かれるだろう」(p. 55)と、毎度同じ憂き目に遭うクウィーニーの側でも半ばあきらめの境地にある。

しかしこの横暴は、ミセス・スレールのクウィーニーに対する恐れに根ざすものであるようだ。幼い頃から利発さを発揮し、オックスフォードでラテン語の学位も取れると太鼓判を押される長女クウィーニーの弟妹に関する意見は、「まだ年端も行かないが、無視できないものであった」(p. 56)。ハリーの学力についてクウィーニーに意見を求めるミセス・スレールは、娘の冷淡な態度に激しく戸惑い、'Heaven helps me, she thought. I am intimidated by my own child.' (p. 58)と、自分が被害者であることを強調するかのようになり、受動態とintimidateという強い言葉を用いて、強い恐怖心を表明している。

後にピオツィとの結婚を認めるよう駄々っ子のように請い願う母に対し、「私の意見が聞きたいの、それとも決まったことを伝えているだけなの？」(p. 229)と、我がままの向こう側にある母親の変わらぬ支配欲を感じつつ彼女を突き放すクウィーニーは、賢夫人として世に知られる母親の浅薄で自己中心な性格の冷徹な観察者として描かれ続ける。クウィーニーの母親に対する視線は、ジョンソンに対する作者ベインブリッジのそれと同様、つねに脱神話化(ディバンキング)の機能を帯びているのだ。たとえば、好意を抱くイタリア人伯爵の前ではしゃぐ母の姿を「振舞いは軽薄でおおげさだし、声には不自然な尊敬の念が混じっていた」(p. 175)とまだ12歳の彼女が斬って捨てる箇所は、もはや娘ではなく同じ「女」としての成熟と潔癖さすら感じさせ、後の再婚をめぐる親子の不和をも暗示している。

結局のところ、ミセス・スレールは自分よりも賢く、自分の本性を見通

すかのような娘クウィーニーを本能的に恐れ、彼女と自分の間の距離を感じると同時に、相手を強制的に支配することで辛うじて自尊心を保とうとしたのではないかと、という疑いに向かって、読者は絶えず誘導されてゆく。同時にクウィーニーの愛情は、理不尽でなにかと抑圧的な母よりは、さほど知性はないが鷹揚な父ヘンリーに向かう。父親に強く手を握られたクウィーニーは、「痛いほどにぎゅっと握られたが我慢した。パパが自分を守りたいと思っていることが分かったからだ」(p. 165)と、その愛情表現には素直に応じている。とはいえ、この父娘のほのかな交流が作中の点景としてびしりと決まっているのは、二人の間のやり取りがここ以外にはほんの数箇所しかないからであって、この場面はむしろ、ヘンリーの存在感の希薄さ、スレール家における父親の不在を暗示する効果をあげている。

ミセス・スレールとクウィーニーを巡っては、もうひとつ見逃せない点がある。ミセス・スレールはジョンソンに対して「自分は公平で優しい態度でクウィーニーに接してこなかった」と悔恨の念を見せつつ、それはかつての自分と同じく娘が父親を過剰に愛しているためであり、伴侶を選ぶにあたって自分と同じ失望を味わわせたくないからなのだと告白している(p. 177)。自分と同じ轍を踏ませまいとするミセス・スレールの姿は、ジョンソンが年頃の娘に成長したクウィーニーを見て母親に似ていると感じ(p. 210)、ファニー・バーニーに向かって「二人はあまりに近すぎたのだよ(They were too close.）」(p. 237)と語る場面と(いささか不穩に)響き合う。ジョンソンがスレール家の子供たちの中でクウィーニーを選んで愛したのは、ミセス・スレールに似ていたからではないかと、読者は思わせられるのだ。本作中に描かれるジョンソン自身は、前章で触れたように、自分は「スレール家の一員('part of a family')」だという意識を持っているが、むしろ作中の描写においては、この母娘と三人で擬似的な家族関係を築こうとしているような印象が強く与えられている。この点も含め、最後にジョンソンとクウィーニーの関係を検討してみたい。

3. ジョンソンとクウィーニー

ボスウェルとミセス・スレールによれば、「クウィーニー」という愛称はジョンソンが名付けたとされているが、作中にあらわれるクウィーニー本人の手紙によれば父親が命名したらしい。ただ Sweeting という愛称の名

付け親はジョンソンだったという (p. 23)。それ程にジョンソンは家族の一員として認知されていたことになる。冒頭でも触れたように、ジョンソンとスレール家の関わりとその発展はクウィーニーの成長と軌を一にしているためか、あるいは彼女が姉弟の中で最も利発であったためか、彼女はジョンソンの愛情を一番多く受けることになり、クウィーニー自身もそれをよく自覚していた。

もっとも、レティシア・ホーキンスへの手紙の中でクウィーニーはジョンソンへの複雑な思いを次のように振り返っている。

As to my relationship with him [Johnson], I cannot in all honesty say that I loved him — he was too large, too variable in mood, too insistent on the attention of my mother — His was a melancholy disposition, an affliction shared by his younger brother, who, it is believed, perished by his own hand. Still, *I was fond sometimes*, for he exhibited a remarkable understanding of children and their needs, *a quality lacking in my mother.*

(p. 167, italics mine)

感情の起伏が激しいジョンソンはクウィーニーにとっても持て余し者であり、「正直に言って、愛していたとは言えない」という。しかし一方で、ジョンソンとミセス・スレールの関係が互いに補完しあうものであったと同様、クウィーニーにとってのジョンソンは、限定的にせよ「母親に欠けた資質」を補う存在としては好ましいものであった。これは世間ではきわめて男性的と思われるジョンソンが、スレール母娘には「女性的」と見なされている点と呼応する (p. 206)。二人がジョンソンに心を開いたのも、彼の「女性の感情に対する誰よりも深い理解」(p. 206) に他ならなかったのではないだろうか。

クウィーニーがジョンソンを「時々好き」であったもうひとつの理由は、年齢や立場の差にもかかわらず、彼女を一人前として扱った——少なくとも扱おうとしていた、ということにある。母親に反発を感じてかクウィーニーは子供扱いされることに敏感であり、それをしない大人を徳とする。たとえば、ジョンソンの故郷リッチフィールドで会ったMrs Scaseの態度を「普通でない」と肯定的に感じるが、それは「クウィーニーを対等な相手として扱い、見下すことなく町に人々に対する彼女の意見を求めた」(p.

110) ためだった。さらに、ジョンソンが8歳のクウィーニーに手紙を送った際のエピソードはこれを裏書するものだろう。ミセス・スレールは「重要人物」であるジョンソンを煩わせないためにクウィーニーに返事を書くべからずと申し渡すが、一方、父親のヘンリーは返事を書くよう促す際「(返事を書く)とお前が(ジョンソン博士と)同じくらい重要人物になるってことを、ママは分かっているんだよ」と鋭く指摘する (p. 76)。これを知ったジョンソンは、ミセス・スレールに抗議する。これは巷間伝えられる、ジョンソンの元奴隷の黒人フランシス・バーバーに対する公平さにも共通する部分だろう。ミセス・デムーランがバーバーに示した差別的な態度をジョンソンが強くたしなめたというクウィーニーの回想 (p. 89) は、さりげないものの印象的な箇所である。

このようにある程度の親近感と敬意を感じつつも、クウィーニーはジョンソンの「食卓でのマナーの悪さと強い体臭のせい」で「好意が増すのを恐れ」、父親のような存在とまでは考えられなかったと述べている (p. 201)。これは、実父ヘンリー・スレールに対する強い思いのためだけでなく、ジョンソンのミセス・スレールに対する執着に性的な要素を感じ取ったクウィーニーが当時も現在もそれを強く拒否していたためでもあるだろう。「ジョンソン博士と母が二人で床の上を駆け回ったバリの朝や、それより前にリッチフィールドで彼が母のペチコートを引きずって、母の部屋から出て行ったのを見た」 (p. 200) ことをファニーへの手紙で苦しげに振り返るクウィーニーは、手紙に記された日付から計算するとすでに46歳、長らく独身を続けた後結婚して2年経った頃である。母親の再婚を「不名誉で、自分勝手な行為」と斬り捨てているこの手紙を引用することで、当時のいわゆる人並みな結婚を拒否し続けたクウィーニーの性的な潔癖さがくっきりと浮かび上がるだけでなく、彼女がジョンソンとミセス・スレールから置いていたに対する距離が読者に強く印象付けられる。それゆえにこそ、先ほど触れたクウィーニーからの返信を約10年ぶりに読み返して涙ぐむジョンソンの姿で終わる最後の場面が、一段とやりきれないものになるのだ。クウィーニーの父親的存在になりきれなかったジョンソンは、「母」「妻」の役割を全うできなかったミセス・スレール同様、スレール家において中途半端な存在と化し、擬似的な親子関係の形成にも失敗する結果に終わる——それが、この歴史小説中で、作者バインブリッジのほどこす解釈であり演出であるのだ。

4. まとめ

以上見てきたように、ジョンソン=ミセス・スレール=クウィーニーの三者の関係は、色々な事情から破綻したり、愛情が一方通行だったりとなねに微妙かつ波乱含みである。日本におけるジョンソン研究の先駆者である福原麟太郎はかつて、こうしたミセス・スレールとの関係は「論文の形で討究していくよりも、むしろ一つの小説に書いた方がいい」⁽³⁾と指摘しているが、これは至言だろう。作者ベインブリッジはジョンソンに深い愛情を示しつつ、忌憚のない筆致でジョンソンや周囲の内面を緻密に描き出すことで新たなジョンソン像を鮮やかに提示し、こうした期待に十二分に応えていると思われる。

ミセス・スレールやクウィーニーに代表される女性たちの側から語り直される(セミ)フィクショナルなジョンソン像はロゴセントリックかつ家父長的な大博士のそれではなく、むしろある意味女性的で、かつ非常に人間臭い矛盾をはらんだものでもある。歴史の半ばは、後世が織りつむぐ^{ヒストリー}物語の領域に属するという小説家ベインブリッジの信念をここに見ることは、必ずしも過剰な思い入れとも言えぬのではあるまいか。

註

- (1) 福原麟太郎『福原麟太郎著作集 2 ジョンソン大博士』(東京, 研究者出版, 1969), pp. 544-5.
- (2) 以下, 本文からの引用は全てこのテキストに拠る。
- (3) 福原麟太郎『福原麟太郎著作集 2 ジョンソン大博士』(東京, 研究者出版, 1969)。p. 546.